博士学位論文審査要旨

２０１６年1月8日

論 文 題 目： アメリカのテレビドラマにおけるアジア系女性像
—1970年代から2000年代の関係性の変遷を中心に—
学位申請者: 俣野 裕美
審 査 委 員：
主 査： 社会学研究科 教授 佐伯 順子
副 査： グローバル地域文化学部 教授 遠藤 徹
副 査： 同志社大学 名誉教授 渡辺 武達

要 旨：

本論文は、1970年代から2000年代のアメリカのネットワーク局のテレビドラマに登場するアジア系女性の表象を、アジア系女性がドラマ内で築く家族像、パートナーシップといった人間関係に焦点をあてて分析したものである。

序論では、研究蓄積の少ないアメリカのテレビドラマにおけるアジア系の女性表象の歴史的変遷についての研究意義を述べ、第1章では、先行研究におけるアジア系女性の映像表現についてのステレオタイプの類型を整理し、第2章では、表象分析の理論と方法について、メディア表象がヘゲモニーのせめぎあいの場であるとするS・ホールの議論を採用しつつ、アメリカの主流的な文化とアジア系文化の葛藤と融和のあり方についての考察という、本論の問題意識を明示した。

第3章から第6章は具体的な事例分析であり、1970年代から2000年代にかけて、10年刻みで時系列的に、ドラマの表象分析を行った。その結果、1970年代のドラマにおいては、アジア系女性は主人公を補佐する役割、白人男性に対する自己犠牲を示すという特徴がみられ、80年代にもその傾向は続いているが、他者との関係性を重視せずに一定の距離をおいた脅威にならない人物として描かれるようになったと指摘される。90年代においては、これらの傾向が薄れ、新たに、同僚やクラスメイトなど他の登場人物と対等で多様な関係性を構築するアジア系女性の例が登場し始めた。同時に、アジア系女性は、理想的なアメリカを体現する人物によって保護され、指導される傾向もみられるが、2000年代に入ると、より多様化、平等化したアジア系の女性登場人物が描かれるようになり、物語構造の中核に近い役割をも担うようになる。ただし、白人のヘゲモニーを維持しようとする傾向が、潜在的には残されていると論じている。

最終章（第7章）では、前章までの歴史的変遷を、萌芽期（1970～80年代）、発展期（1990年代）、円熟期（2000年代）としてまとめ、時代が新しくなるにつれて、アジア系女性のイメージは改善傾向にあり、それは、アジア系の活動団体がメディアにおけるアジア系のイメージ向上を求める活動を実施してきたことの影響であり、あわせて、東西冷戦期や、日本の経済力の上昇といった国際情勢が、メディアにおけるアジア系の表象にも影響を与えた可能性があると結論づけている。

メディアの表象と社会的現実との影響関係、時代区分の妥当性、東アジア以外のアジア系女性の表象の多様性、ネットワーク局以外の事例分析に関する議論は、今後の課題として残されたが、欧米の映画研究における表象分析の方法論に基づき、人文学的な作家・作品研究とは異なるメディア学的な視点からアメリカのドラマ研究を行ったことは、アメリカ研究にも寄与し得る本論文独自の成果といえる。よって本論文は、博士（メディア学）（同志社大学）の学位を授与するに

ふさわしいものと認めることができる。

総合試験結果の要旨

２０１６年1月8日

論 文 題 目：　アメリカのテレビドラマにおけるアジア系女性像
　　—1970 年代から 2000 年代の関係性の変遷を中心に—
学位申請者:　俣野　裕美
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　教授　佐伯　順子
　副　査：　グローバル地域文化学部　教授　遠藤　徹
　副　査：　同志社大学　名誉教授　渡辺　武達

要　　旨：

上記審査委員三名は、2016 年 1 月 8 日（金）の公開学術講演会の当日、午後 5 時 45 分から 6 時 15 分まで、渓水館 1 階メディア学資料室にて、口頭試問を行った。メディア学、アメリカ研究、テレビドラマ研究の関連事項についての質疑に対し、申請者は的確に回答し、当該分野ならびに関連領域についての深い知識と理解を有していることが示され、また、語学試験（英語）についても、専門分野に関連する十分な語学力を有していることが確認された。以上により、本学位申請者の総合試験の結果は合格と認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： アメリカのテレビドラマにおけるアジア系女性像
－1970年代から2000年代の関係性の変遷を中心に－

氏　　名： 俣野　裕美

要　　旨：

本論文は、1970年代から2000年代のアメリカのテレビドラマに登場するアジア系女性の表象を考察したものである。特にアジア系女性が作中で築く、他の人物との関係性に焦点を当て、彼女たちが人物同士の中でいかに「抱擁」されたのかを、各時代背景と共に論じた。

第0章は序論として、本論の目的が研究蓄積の少ないテレビドラマにおけるアジア系女性の表象の変遷にあること、表象を論じるにあたって基礎的な背景となる、アジア系の人々がアメリカで辿ってきた歴史について述べた。

第1章では、主に先行研究の動向と検討を行った。研究の蓄積の多い、映画におけるアジア系表象を中心に概観し、彼らを描く時に付与されるステレオタイプの類型について説明した。そしてアジア系女性は、アジアそのものを象徴する存在として描かれる傾向にあることを論じた。これまでの研究では、対象が映画であってもドラマであっても共通して、アジア系の人物描写そのものに焦点を当ててステレオタイプや侮蔑表現の存在を指摘し、彼らがいかに排除されているかという観点から分析されることが多かった。しかし、アジアの文化やアジア系の人々は古くから、積極的に求められ、表象に取り込まれてきた存在でもある。そのため、排除の観点のみでは不十分といえる。そこで、本論では人物像に注目するのではなく、アジア系が作中で築く他の人物との関係性に焦点を当て、アジア系の人物が人間関係の輪の中にいかに抱擁されてきたのかという見方から分析を行うことにした。

更に、研究対象とするアメリカのテレビドラマについての概説を行い、ドラマが制作、放送される過程や内容の傾向、テレビ番組における人種差別が政府からも企業からも禁止されていることなどを述べた。

第2章は、表象分析の理論と対象、手法について説明を行った。理論的背景としては、メディア表象は、ヘゲモニーのせめぎ合いが行われる場であるとするS・ホールの理論を採用した。また、分析対象としては、視聴者層の厚いネットワーク局のテレビドラマに登場する、アジア系女性とした。上述の通り、アジア系女性はアジアを象徴する存在であることがその理由である。更に、身体的な似通りから、相互に交換可能な人々として扱われてきた中国系、日系、韓国系の女性を対象とした。分析するドラマは、正確な情報が手に入りやすい1970年代から2000年代の作品とした。手法としては、次の二段階を設定した。①時代の変遷を追うため、アジア系女優が1シーズンに5割以上出演したドラマを調べて10年ごとに区切り、リストを作成する。表には、ドラマの簡単なあらすじを記した上で、主人公、もしくは主人公級の人々（主人公を明確に定めない形式のドラマの場合）にとってアジア系女性の役がどのような関係性にあるのか（友人、恋人、部下、上司、あるメンバーの一員、など）を記載し、各年代でどのような関係が描かれる傾向にあるのかを把握する。②次に、実際の作品を視聴し、アジア系女性が他の人物との関係性の中で、具体的にどのような関わり合いをしているのかを調べる。これには、ある程度のストーリーを追えるだけのエピソード数があり、アジア系女性がそのドラマの中でコンスタントに特定の人物と接するほど、重要な役所として設定されていることが望ましい。そのため、リストの中からドラマ自体が30エピソード以上継続しており、1つのシーズンにアジア系女性が8割以上出演している、DVDもしくはVHSで視聴できる作品に絞った。この条件を満たす作品には、8作

品が該当した。詳しい分析を行うため、アジア系女性が出演する場面の会話を全て文字に書き起こし、作品の中でアジア系女性が長い期間に渡って何度も会話の機会を持ち、かつ重要な関係性を築いている人物を特定する。そしてその人物との間で何度も繰り返されている会話のパターンを抽出し、両者の関係の特質を明らかにする方法を取った。

第3章からは、具体的な分析に入る。1970年代のアジア系女性が出演するドラマを表にしたところ、彼女たちは主人公たちのために側に控え、補助をする関係性を築く傾向が見られた。また、詳しい表象分析をする条件に該当したのは、『ザ・コートシップ・オブ・エディーズ・ファーザー』という作品であった。この作品では、ミセス・リビングストンという日本人女性がハウス・キーパーとして、妻を亡くした白人の父子のもとで働いていた。この三人は実際の家族のように描かれていながら、リビングストンが自ら積極的に自己犠牲をして、父子の性的自由を維持する言動を取っていた。この父子は、理想とされる白人のマスキュリニティを体現したような人物であり、リビングストンは自己犠牲を通して理想の白人男性の性的自由を守っていた。このような1970年代の関係性を、冷戦構造を中心に社会背景と共に考察したところ、アメリカは家族のような温かさの中で多人種、多文化が共存できる人種的寛容を持った国であることを示しながら、資本主義国であるアメリカのヘゲモニー、白人そして、男性優位の社会構造を維持し、支持する機能があることを指摘した。つまり、70年代のアジア系女性の抱擁は、アジア系女性と他の人物が、既存の体制を維持、強化する関係性を築くという条件の下で行われていたといえる。

第4章では、1980年代の分析を行った。80年代のアジア系女性は、主たる人物を補助し、妻などの家庭化された関係性を築く傾向にあった。この中から、医療ドラマの『セント・エルスウェア』に登場する日系の研修医、ウェンディの表象を分析した。彼女は他者との関係性の中で、共感を示さない、冷淡な態度を取り、その異質性が際立っていた。そして周囲からは距離が生じ、孤立した様子で描かれることが繰り返されていた。このような描写を日本の経済力が上昇し、アジアが脅威そのものとして認識されていた80年代の社会状況と共に考えると、アジア系女性はイエローペリルとは真逆の、既に脅威の要素が抜き取られた関係性の中にあったといえる。このような傾向の中で、女性の医師であるウェンディは出過ぎてしまった。それ故に誰とも関係を築くことなく周囲から孤立してしまっていたのである。80年代の抱擁は、アジア系女性は他者との間に、脅威が除去された、安全な関係性を築くという条件下のもとに可能なものであったといえる。

第5章では、1990年代の作品を扱った。この時代のアジア系女性は、秘書やアシスタントなど、誰かを補助する関係性もあれば、クラスメイトや同僚、友人など、対等な立場の場合もあった。多様化、平等化された関係を築くようになり、進歩的な表象が現れるようになった。更に『ツイン・ピークス』、『ER緊急救命治療室』、『アリーmy love』の三作品を詳しく分析した。これらの作品には革新的な関係性が描かれる一方で、アジア系女性は何らかの形で理想のアメリカを象徴する人物によって、保護され、慈悲を与えられ、指導される関係性を築いていた。このような90年代のアジア系女性の関係性を社会背景とともに考察した。90年代は、アジア、特に中国文化の流行や、中国系女性が目覚ましい活躍を遂げた時期であり、それ故にドラマの中でアジア系女性が築く関係性も向上した。その一方で、日本に代わって中国経済が台頭を見せ、新たな脅威として認識されたことを背景に、アジアの迫り来る脅威を押さえ込もうとする働きが内包されていた。90年代は、アジア系女性を対等で多様な関係性のもとで抱擁しつつも、そこにはアジアの脅威を押さえ込むという制限が付け加えられていた。

第6章は、2000年代を論じた。アジア系女性は、90年代に増して多様化、平等化した関係性が描かれるようになった。また、彼女たちは物語の進行上、重要な関係性を築く兆しが見られるようになった。アジア系女性は関係性の中で自主性を発揮し始めたのである。次に『ロスト』、『グレイズ・アナトミー』、『グリー』の三作品について考察した。通常はアジア系女性と白人男性の恋愛が多く描かれる中、これらの作品においては、アジア系の男女の恋愛が描かれていたり、ア

ジア系女性と白人女性が親友として互いに助け合う関係が描かれたりしていた。これまでで最も進歩的な関係性である一方、白人やアメリカの主流文化を頂点に置こうとする側面も見られた。2000 年代の社会では、テレビドラマの人種構成や描写を改善しようという気運が高まり、またアジア文化の流行も前年代同様に続いていた。こうした中、アジア系女性が築く関係も最も革新的なものとなった。しかしその一方で、白人のヘゲモニーを保つ手綱も存在し、潜在的なアジアの脅威を阻止する描写も見られた。つまり 2000 年代は、これまでの年代とは異なり、アジア系女性は、他者との間で自らが持つ力や自主性を発揮することが可能な形で抱擁されるようになった。しかし、その中にはアジアの潜在的な脅威を支配できるようにする片鱗も残されているのである。

第 7 章では、終章としてこれまでの表象の変遷をまとめた。70 年代の補助の関係性から 2000 年代では多様化、平等化、アジア系女性が主体性を発揮する関係性が現れるようになり、時代を経るに従って、表象は改善したといえる。表象に改善を与える要素は多様にあるが、その一つの可能性として、本節ではアジア系の活動団体がメディア上でのイメージ向上を求めて行ってきた歴史を調べた。団体は、1970 年代頃から誕生し、90 年代で発展期、2000 年代で円熟期を迎えた。本論の分析でも 90 年代を分岐点に表象が改善しており、アジア系団体の活動が、テレビドラマの表象に何らかの影響を与えたことが指摘できる。